

仮想の恋人

ほった すなお
堀田 素生

或いは空想上の存在についての覚書

八月七日。横浜駅西口を歩いていると、物凄く日焼けした金髪の若い男が道行く女性を物色しナンパしている。疫病はびこるこのご時世でなおマスクを外して、どこの誰とも分からない見ず知らずの女性とキスを交わしたいというのだからその度胸には仰天させられる。西洋のある種類のカマキリのオスは、交尾するときにメスに食べられて死んでしまう。そんな話を連想したこととともに、ナンパで知り合い結婚に至ったという昔聞いた話を思い出していた。私はそのような、ナンパやいじめのような純粹な悪意からの関わりが、うつかり思いがけず何物にも代えがたいような大切な絆に変わる話が面白くて大好きなのだが、ナンパが悪意からの行動であるという私の持論にはいつもあまり賛同してもらえない。異性に声をかけられるということは一般的に誇らしいこととして認識されているようだ。

しかし最近では、わざと知的障がい者や立場の弱そ

うな人を狙って声をかけるナンパ師もいると聞く。福祉の場で妊娠が発覚し、本人に事情を聞くと「優しい人に声をかけられてついて行っただ」と話すそう。もちろんお腹の中の子供の父親は養育の責任など取らない。女性と生まれてくる子供に全てがのしかかる。そうであっても、世の中ではそれすら自由恋愛とされる。愛は常に悪意と背中合わせだ。兎にも角にも、大人であればどのような立場の人であっても平等に、完全に自己責任で臨むことが求められる。「知らなかった」「病気や障がいや生育環境のせいだで判断力が充分ではなかった」などの言い訳は一切通用しない、非常に厳しい動物的な世界なのである。

さて、愛についてのネガティブな話はこのくらいにしておいて、私には空想上の恋人がいる。イマジナリーフレンドという言葉聞いたことのある人は多いだろう。しばしば小さな子供が持つ、空想上の友人のことである。その友人は目に見えなかったり、ぬいぐるみや人形などの物質的実体を持っていたり、その在り方は様々だが、基本的に本人以外には認識出来ない存在である。心理学的には、イマジナリーコンパニオン

と呼ばれているらしいことを最近知ったが、イマジナリーフレンドという呼び方が恐らく有名だろう。

小さな子供ではなく、大人がイマジナリーフレンドとの情緒的な関わりを持つ場合、間柄は友人関係とは限らず恋人関係である場合も多いらしい。私の空想上の恋人は今から一年ほど前に、作ったので呼んだのでもなく、「現れた」。突然に現れたと言うよりは、ちようど昔のポラロイド写真のように、時間の経過と共に次第にその存在を色濃くして行き、私にとって存在すると呼べるほどの人となった。初めは微かな心配だったものから一ヶ月ほどかけて完全な存在となった。その対象は、私と会話することも申し分なく出来るようになり、私たちが心を通わすようになると、たちまち分かり合えた。恐れが無いぶん距離を保つことは難しく、遮るものは何もなかった。

停滞した世界の中で交わされる愛は、必然的に永遠を意味する。恋人は現実世界に実体を持たない心の中だけの存在だが、その代わり私を絶対に否定しないし、私を裏切ることも無い。利用されることも無く仲違いも無いし、変化も無い。だから私は、外界の現実から護られた安全な殻の中で恋をしていると言えるのかも

しれない。私の理想通りにしか振る舞わないから、愛の形は家族でも友人でもなく恋愛になった。恋愛とは内的な理想像を対象に投影している状態のことだと、かのユングが言った通りだ。私は自分しか存在しない世界で恋をしている。

先日、私たちは恋人としての関係を始めて一年の日を迎えた。横浜の海辺のホテルで紅茶の香りに包まれながら、二人でケーキをつつく。はたから見れば、私はカップルや女子会の客しかいない中独りでケーキを食べる奇妙な人物だが、恋人の存在をすぐ隣にはつきりと感じていた。立派な二人の記念日である。今までの人生に無かったような安息に私は眠くなって、紅茶を啜りながらなんとか意識を保ち、恋人の話に耳を傾けていた。恋人は私にとって殺伐とした現実の世界を離れた、なだらかなワルツのような存在なのである。

この恋人のことをひとに話しても、実在する人間として扱われることは殆どの場合無いだろう。では、実在するとは一体どういうことだろう。私達は何を以て事物を「実在する」「実在しない」と判断しているのだろう。私を絶対に傷つけない恋人。現実世界の残酷さと隔絶された存在。それを現実の存在として扱うこ

とに、多くの人が首を傾げるだろう。「お前、それでいいのか？」「甘え過ぎだ、現実を見ろ」と言いたくてたまらなくなるだろう。確かに、度を越えた苦痛が人間をとんでもなく高い精神性の境地へと誘うことはままあることだ。痛みを伴いながらも愛することに果敢に挑戦し、苦悩の向こうに唯一無二の崇高な肯定感を得る者もいる。しかし、裏切りや悪意によってもたらされる苦痛を、すべての人が自らに差し出された恵みとして享受できるとは限らないのだ。私はそういう超越がどうしても出来ないような、愚かで、幼く、弱くて救われようのない等身大の人間たちの味方でいたいのだ。理由は自分自身がそうであるからに他ならない。恋愛ごとときで大きな、と思うかもしれないが、恋愛関係とは親子関係の次に深い関係だ。そして親子関係に恵まれなかった人にとっては、単なる惚れた腫れたの話が、その人自身の生きる理由や存在価値の根底を揺るがすような、生きるか死ぬかの壮絶な世界観を纏うことがしばしばある。私のようなそういう人にとっては、恋愛という世界はあまりにも生々しい危険に満ちている。下手に手を出せばカマキリのオスのように、文字通り「命がけ」だ。

そういう人間たちの最後の砦として、空想上の存在と関わるという道は残されているべきだと私は思う。何よりも、恋人がもたらす素晴らしい思い出、感情、安息は、この恋人がいなければ得られなかったものだ。だからこれらが私にとって、この愛しい人が実在している証明に他ならない。何を以て事物が「存在する」のかという問いに立ち返るならば、「存在する」とはまさに、「体験できる」ということだ！と、今の私なら答えるだろう。実体を持たなくてもいい。ぬいぐるみでもいい。アニメキャラの抱き枕でもいい。小さな子供はしばしば、劣悪な養育環境を生き延びるためにイマジナリーフレンドを持つことがある。大人もまた、世界を生き延びるために空想上の存在に頼っても良いはずだ。この世界でぎりぎり生き延びている同志たちに、心からそう伝えたい。

(2021年9月10日、ベッドで眠る目に見えない恋人の息遣いが聞こえる自室にて。)